

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第85号（周年記念号）（2013年6月）

風に吹かれて（63）

白井啓治

『祝いの餅も三つまでと七福神のいふ』

この会報も、先月84号を発行し、まる七年を終えることが出来た。今月からは八年目を歩むこととなるが、今月号は七周年達成の記念号として、これまでの七年を振り返つての感想等を先月号に続いて少し述べてみたいと思う。

一つの活動において十年一区切りの目標を立てそれをクリアしていくためには、三、五、七、九そして十、と言うように小刻みのステップでの継続計画を持つ事が必要である。小生これを七五三の法則だとか原理なんて言い方をして、その節目を大切に考えている。

中でも七は、十年継続への重大な節目といえる。七年のクリアをみんな喜び、その後の二年を頑張つて九重の祝いを行い、その勢いで後の一年を駆け抜ける。まあ、こんな風に十年が続けられればいいと思っている。そして次の十年にも気持ち新たに同じように三、五、七、九、十のステップで継続させていけば良いだろうと思つているのだが…。

ふるさと風の会および会報「ふるさと風」の始まりの経緯は先月号に書いたとおりであるが、風

の会および会報の根底にあるものは「我がふるさとをヨイシヨシするための市民プロ活動を継続させる」と言うことである。

「ふる里おこし」と言うスローガンを持つて始めた「ふるさとルネサンス講座」であったが、その講座の目指すものは「市民プロの育成」であった。

市民プロ：？ 何だそれは、と思われるだろう。しかし、この市民プロという概念の認識のできない所には、活性化というものはなく、沈滞そして沈没しかないと言える。

一般にプロと言うとお金を貰つて何かをする人、職業人と認識されている。そのことについて異議をさしはさむつもりはない。だが、プロとしてあるためには金銭の授受とは全く無関係のところにあるプロフェッショナルとして絶対不可欠の要件がある。

それは、プロあるいは職業人としてのスキルの本質を支えている力、即ち「既成を打ち破る力。型破りを創造する力」を有していることである。既成を打ち破る、型破りをする、という表現の嫌いな人は「仮説設定と考察能力」と置き換えても良いだろう。いずれにせよこの力はジャンルを超えてプロにとっては必要不可欠な力である。

此の地に住む市民として、ふる里を大切に思い、

未来に希望を繋ぎたいと考えるのであれば、プロとしての絶対要件としての力を身につけた市民の存在が大きなカギを握ることになる。その意味をもって「市民プロ」という概念をルネサンス講座には持たせ、それに続く「ふるさと風の会」の活動にも市民プロとしての気概を持つて当たつているのである。

こういうと実に大袈裟ではあるが、活動継続の実際にはこの大袈裟がぶれない軸を造るうえで非常に重大なことなのである。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

自分の住む里をふる里として次代の人達に残し伝えていくためには、古びた因習であつては次代の人には受け取る魅力は何もない。ましてや現体制に媚び、鳥合の衆に阿るようなものに対しては新しい世代の者達には何の魅力も感じない。

ふるさと風の会は、打たれる杭であれ、と個人的には思っている。そして、とてつもなく長い杭を立て「どうだ打ってみる！」と断言することの出来る会であつて貰いたいと願っている。

まだ十分な覚悟の出来ていない風の会なので、「祝いの餅も三つまで…」と風の呟きに託したのではあるが、自分の人生に覚悟を確りと持つのは煩惱が多すぎてなかなか難しいものである。

七年の小史

打田昇二

「ふるさと風の会」も七周年を迎える…と、胸を張つて言いたいところだが、人生の貯金が乏しい高齢者は、正直なところ過ぎ去った歳月よりも明日が心配な面もある。それでも七年間に亘つてあれこれと「ふるさと風」に勝手なことを書き続けてきた罪は重いと思うので先ず、此の場をお借りしてお詫びすると共に、呆れながらも面倒を見て下さる主宰の白井啓治さんにお礼を申し上げたい。

反省をして余計なことを書かなければ良いのだが「ふるさと風の会」の目指すところは「ふるさととの歴史・文化の再発見と創造…」であるから、昔のことで何か疑問があるのに黙っていては「嘘つき爺さん！」で終わってしまうし、会員の義務

にも反することになるので八年目に突入しても懲りることなく、自分自身でも怪しいと思うような愚説を展開させて頂くことにする。御容赦を賜りたい。

準備に先立ち白井啓治さんは「七周年を重視している」と言われた。確かに「七」という数字は意味が深いと言うか、良いことに使われると言うか、私を知る範囲でも「七福神」を筆頭に、子供の出生を祝う「お七夜」、成長に付随した「七五三」、一週間が「七日（日月と火水木金土の星）」であり、「七夕（たなばた）」も主要な行事である。宝物として「金・銀・硝子・赤珠・赤珠・赤珠」

（きんぎんりりりりしやこせきしゆめのう）の七つが挙げられ、今の日本では無理だが古代ギリシャには「七賢人」が居たし、魔性（悪）が入り込まないように張り巡らす障壁を「七里桔界」と言った。そして強引だが、目出度いことが続くようにと「五八〇年七回り〓五八〇年に、干支の一回りである六〇年×七（四二〇）を足すと千年」などという祝言葉もある。

神話の世界を引き合いに出すと、有史以前の古代日本を知る石上（いそのかみ）神宮の御神体は七十五センチ程の古い太刀であるが、これが「七支刀」と言つて左右に三本ずつの枝が出ている。この太刀は、荒唐無稽な神話の世界では日本に未だ国家が存在しなかった（世界でもエジプト王国ぐらしか無かつた）時代に、鹿島神宮の祭神である武甕槌命が天照大神に頼まれ、全員が意識不明で全滅の危機に瀕した神武天皇の軍隊を助けた太刀ということになるのだが、是は嘘にしてもヒド過ぎる（天照大神と神武天皇では時代が合わないし、薬も無いのに心肺停止の危篤患者を何百人も救える訳が無い）話である。

神話は神話として放つておくことにして、実際

には七支刀が日本に伝わったのは西暦二、三百年代で朝鮮半島から九州王国に伝わつたらしい。それが七世紀以後に九州王朝の衰退で天皇家に献上され、天皇の神庫であつた石上神宮に収蔵されたと「失われた九州王朝」天皇家以前の古代史（古田史子会・古田武彦先生の著書）に書いてある。

ご専門の先生方には叱られるかも知れないが、私が勝手に書き始めた「平家物語」でも冒頭の「祇園精舎」の中で、平家の始まりは平国香から正盛までの六代が「…諸国の受領（ずりょう）公務員で言えば地方役人）たりしかども、殿上の仙籍をば未だゆるされず（天皇に近侍できない）」とあり、天下を取るようになった平家は七代目の忠盛（清盛の父）から目が出てくることを示唆している。

その平家は一族が余りにも高い地位に登り過ぎたため、世間の反感と言うより後白河法皇と公家たちの怒りを買ひ、辛うじて生き残つていた源氏と地方に埋もれていた平家系武士団に引き摺り降ろされることになる。その教訓で私は「人間は高い所に登るべきでは無い」と思っているから東京スカイツリーにも興味が無いし登る気も無い。何よりも塔の高さは武蔵を洒落て六三四メートルらしいのだが、これは四捨五入しても七百メートルにはならないことが気に入らない。

養和元年（一一八一）一月の末に平清盛は病気に罹つた。平家の地盤であつた西国で「反平家」の軍勢が旗揚げをしたため是を討つべく総大将の宗盛が出かける矢先である。出陣の予定は二十七日であつたが、めでたい「七」の数字も裏目に出ると恐い。清盛の病氣は理由の分からない高熱である。熱も三十七度ぐらゐならば安静にして長くても七日ぐらゐで全快するが、清盛の場合は体温計

が壊れるほどの高熱である。それが七日程も続いて二月四日に絶命した。死亡したのが満年齢で七×九の六十三歳である。遺体は七日に茶毘に付され、神戸近辺の経が島に埋葬された、と伝えられる。

此の時に鎌倉に居た源頼朝は平頼盛(頼朝少年を助けてくれた池禪尼の子・清盛の異母弟)に手紙を出し、また後白河法皇に書を呈して「:臣(頼朝)敢えて乱を成すに非ず。すなわち乱を安んずるのみ。陛下(後白河法皇)なお、平氏を棄てざれば(平氏討伐を望みで無いならば)すなわち請う。両(ふたつながら)源平両者)和を講じ、二姓並び仕うること往昔の如くせん。其の忠、其の否、簡ぶ(えらぶ)こと陛下にあり」と申し入れた。和平交渉を提示したのである。

是を受けて後白河法皇は平家側に此の話をしたのだが、平家の頭領は清盛の後を継いだ宗盛である。此の人物は壇ノ浦でも見苦しい態度を取ったようで、実は清盛の子では無かった(嫡流の男子が欲しい清盛が時子夫人に男児を産め、と命じたが、人間は養鶏場の鶏と違って生み分けが出来ないから生まれたのが女兒だったので同じ頃に生まれた職人の子と交換した)とする説があり、清盛の後継者としては、不適格な人物であったから、後白河法皇から示された和平交渉の案を検討することもせず、一門に相談することもせず蹴っ飛ばしたのである。その言い分は「父・清盛の遺言で頼朝と戦え!と言われたから:」と、七歳の子のような純情な思考で和睦を拒否した。

此の時の後白河法皇の考えは、朝廷が都を抑え、平家を西に定着させた上で、源氏には鎌倉を拠点として東国を支配させ、東北地方は奥州藤原氏を置いて相互牽制により戦乱の時代を終わらせる:

と言うもので、いち早く都に突入した木曾義仲は世間知らずで既に自滅していたから、此の案はとかく評判の悪い後白河法皇にしては良い考えであったのだが平宗盛に拒否されて折角の和平交渉も挫折してしまった。然も其のことに依り平家が滅亡するのであるから、組織のリーダーは調子が良すぎても無能でも困るといふ教訓である。現代でも政治家と称する連中は「調子が良い」か「何も出来ない」か、の二種類しか居ないようなので余計な心配をしている。

平安時代の末期、その気になった源頼朝が平家を滅ぼして日本国中を支配することになるのだが、この男は三〇年近くも伊豆の辺鄙な場所で囚人として生活していたのであるから、自分の家臣など居ない。平家打倒に立ち上がったのは、平家に服従していた武士たちの中で落ちこぼれた連中である。世の中は何事も公平とはいかないので陽の当る場所にいる者と、そうでない者との差は大きい。地方の武士団は何年かの交替制度で都の警備をさせられる。その負担が大きいのに何の恩恵も無くて平家一門だけが良い思いをしているから不満がつる。

囚人の源頼朝を監視していた伊豆の武士団で、藤原系の伊東氏は不満が有っても仕方が無いと諦めたが、同じく監視役の北条氏は嘘か本当かは別にして「桓武平氏系」を称していたから伊東氏とは同じ感情では無い。北条氏の申告によると平貞盛の子・維将(これまさ)を祖先としている。平清盛の系統は貞盛の子・維衡(これひら)で維将の弟になると思われるから、北条氏の方が正系だと思つている。

さらに頼朝夫人となった政子の父親・時政は八

幡太郎義家の母親となる女性の兄か弟の子孫、つまり鎌倉一帯を領有していた平直方の曾孫らしいので平貞盛からは七代目になる。田舎侍であっても「俺が何とかしなければ!」という気概を持っていたと思われる。幸か不幸か囚人として預かっていた源頼朝が、時政の娘で良く言えば男勝り一般にはハネツカエリと言われる政子と一緒に生きてくれた。先は見えないがチャンス到来:治承四年(一一八〇)八月十七日に源頼朝を立てて北条時政が平家に背くのである。

そういう経緯があるから、鎌倉幕府の基礎が出来上がった時点で頼朝は暗殺され(落馬が原因とされて、暗殺の責任が馬に転嫁された)北条氏が後を継ぐ。その理屈から言っても、人間は余り高い地位には登らない方が良いので、既に述べたように私は東京スカイツリーに興味が無くて、高い所は筑波山にでも行けば良いと思つている。

筑波山は容姿端麗なだけで無く、雪も積もらないし展望も開けていて女性でも安心して登れる山である。ただ登山道に「か所だけ「弁慶の七戻り」という難所?が有る。登山道に巨岩が覆い被さつていて今にも落ちそうであるから、さすが剛胆な弁慶も七回戻つて、ようやく通過したという。頭から嘘だ!と言つてしまえば実も蓋も無いが:。

弁慶の主人である源義経は余りにも手柄を立て過ぎて、それを後白河法皇が頼朝を牽制する目的で上手く煽つて官位を与えた。義経は頼朝配下の武将として平家と戦っていたのであるが、本人は兄弟という意識がある。頼朝の方は家臣としか見ていない。これは仕方が無いことなので、一人の家臣も居ない立場で平家を倒すというドンキョーテにも劣る立場の頼朝にとっては、味方になつて

くれる武将たちの手前、兄弟だの親類だのと特権を与えては居られないのである。

源氏一族の或る武将が戦場から頼朝に手紙を出して「自分は指揮官として出陣して来たのに、武士たちが言うことを聞かないので、何とかして欲しい」と言ってきた。頼朝は返事を出して「お前さんを指揮官などにした覚えはない。他の武士団は何の見返りも無く協力をしてくれているのに勝手なことを言うな！サツサと戦死してしまえ！」と励ましている。そう言う例からしても頼朝は身内を庇う感覚がない。

其の点では平家の一族重視が際立っており、それで団結していたのだが北条氏のように一門に入れて貰えなかった武士団には面白くない。

其れとは違つて源義経は頼朝に対して兄弟の意識を捨て切れずにいたから次々と手柄を立てながら次第に疎外されてしまうことになる。後白河法皇はそういう状況を察知して頼朝の勢威を削ぐために義経を利用することにしたのである。宴会のビールでは無いが、取り敢えず「従五位の下、檢非違使左衛門の尉(けびいしとさもんじょう)」と云う、武士としては誰でも成りたい花形の職を与えられて、義経は有頂天になってしまった。此の地位は特例で「仙籍を許される」つまり平家が七代も掛かった昇殿が許されるのである。

兄で有り主君でもある頼朝は少年時代に貰つて既に期限の切れている右兵衛佐(うひょうえのすけ)の俣であるから無冠に等しい。従う者たちは敬意を表して「前兵衛佐(前)武衛」などと呼んでくれるが総大将である自分が無冠なのに、命令で動いている弟の勝手な叙位叙勲が許せない。それに加えて平家が滅亡した壇ノ浦の戦いでは海に飛び込ん

だ安徳天皇生母(清盛の娘・建礼門院・徳子)を義経が救助して必要以上に介抱した(介抱の仕方いろいろ有る)らしい。さらに清盛夫人・平時子の姪を妻にした。父親の平時忠が秘密文書を持っていて義経に押収されたのだが、それを返して貰う条件として娘を差し出したらしい。多分、裏金の帳簿でもあったのか：義経は兄で有り主君である頼朝の許しを得ずに指揮官の役得を十分に享受したのである。

平家の最後となった壇ノ浦の合戦では平家方が大型の船五百隻に分乗していたのに対し、源義経は自由の利く小船七百艘で戦った。最初は弓矢の戦いであるから大きい船に居たほうが被害は少ない。不利と見た義経は、どういう手段を用いたかは不明だが謀略で平家側に裏切りをさせたらしい。義経は優先的に女性を救助し、平家の軍勢は皆殺しにした。合戦の状況は刻々と鎌倉に報告されるから、頼朝は「兵士の略奪を禁じ、全ては朝廷の指示に従うよう」命令を出したのだが、手遅れであつたらしい。義経軍の監視役は梶原景時なだが義経は是を軽んじていて二人は仲が悪いから、戦場から鎌倉に来る情報は義経にとってプラスになるものが全く無い。

文治元年(一一八五)五月七日、源頼朝は義経に対して、捕虜となつた平宗盛らを連行して鎌倉へ来るように命じた。「七の日」は良いことが有る筈であつたけれど、縦横無尽に活躍し過ぎた義経の行動は、監視役の梶原景時により逐一報告されていたから前評判が良くない。

鎌倉を前に、凱旋將軍としてパレードでもしたい源義経を待ち受けていたのは北条時政であり、捕虜を受け取ると領収書も出さず冷たい態度で

「はい、御苦労さん！」と言つたきり、消えてしまった。

実質的な平家追討の功労者である源義経は、凱旋して来てもご褒美が貰えないどころか鎌倉にも入れなかつたのである。現代ならば繁華街を歩いているだけでテッシュペーパーが貰えるのに気の毒な話ではあるが、頼朝の周りにいる重臣たちも夫婦喧嘩と間違えてとりなしをしない。結局、義経は京都に戻るしかなかったのだが、後白河法皇に頼んで九州の地頭にして貰つたけれども、それが仇となって鎌倉からの追っ手が続々と来るので九州にも行けず、途中から身を隠して逃亡生活を送ることになる。

ギター文化館

2013 CONCERT SERIES

- 6月 9日 國松龍次ギターリサイタル
- 6月23日 高橋竹童津軽三味線コンサート
- 7月 7日 井上銘・金澤英明ジャズライブ
- 9月 1日 ロス・トレス・アミーゴス
- 9月 8日 里山と風の声コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

多分、逃亡生活の途中で源義経主従が筑波山にも来たであろう…という推測から「弁慶七戻り」が名所になったのである。日本国中を逃げ回った義経は衣川館に辿り着き藤原秀衡に匿って貰った。苦勞して奥州から出てきて七年目である。

文治五年（一一八九）七月十九日、頼朝は大軍を率いて奥州攻めを行い、義経と藤原氏を滅ぼして「金」を奪う。人間の征服欲はキリが無いが、やがて頼朝も北条氏に暗殺されるから「因果応報」である。

それに先立ち、寿永四年（一一八五）十二月、何としても義経を捉えたい源頼朝は諸国に「守護・地頭」を設置した。是に依り従来の国司制度は有名無実化して律令制度が崩壊した。常陸国では平将門の事件以来、筑波山麓を中心として日本一と言われる程の広大な領地を保有しながら常陸国府の大掾職を世襲していた桓武平氏系の大掾氏が没落することになるのである。（大掾という国府の地位が消滅してしまったため）替わって頼朝の信任が厚い小田氏が常陸国の守護職を手に入れ急速に伸びて来る。曾我兄弟による富士の裾野の仇討事件（実は北条氏らによる頼朝暗殺未遂事件）の後である。

中国の諺らしいが「天下意の如くならざるもの恒に十にして七、八に居る」というのがある。十中八九は思い道理にならない…と言うことらしい。「ふるさと風」が曲りなりにも七周年を迎えられたことは有難いことであり、素晴らしいことなかも知れない。

「ふるさと風」をお読み頂く皆様にお礼を申し上げます。

七周年を迎えて

兼平智恵子

ふるさと「風」を愛して下さっている皆様にご感謝申し上げます。

文章力の向上。原稿のメ切を守ろう。今月こそ、今月こそと七年が過ぎてしまいました。

知恵もない私にこの名は似合わない、やさしく「ちえこ」にしよう。

ところが最近、古代漢字を研究する先生曰く「あなたは物事を瞬時に考えて行動を起こせる、人に恵みを与えることの出来る人なんですよ」と。

本名の智恵子にもどります。

これからもどうぞ宜しくご指導の程お願いいたします。

八年目へのスタート

菅原茂美

この街に花開いた「ふるさと風」は、先月号で、第84号・満7年の中間点を通過した。マラソンは限定された距離であるが、我々のコースは無限の道のりである。それが途切れないよう我々は毎月、会員の誰一人、一度も欠かすことなく、投稿を続けた。多くの読者に励まされ、我々は、明日に向かって、より力強く走り続けたいと願っている。

私自身は2007年12月加入で、12年1月、50回分の投稿を纏め、『遙かなる旅路』として、刊行した。いささか独断と偏見にとらわれているかもしれないが、精一杯の私の魂の叫びである。投稿の永続こそ、我が「さだめ」と信じ、淀んだ

空気を払いのけ、明るい未来を切り開くための提言を、今後一層、継続していきたいと思っている。

この星に生を受けた我ら人類。むやみやたら大脳を膨らまし、「文明」らしきものを築きあげてきた。しかしその全てが理にかなない、万物の霊長として、称賛に値するかといえば、ちよいと疑問。

緻密そうでは実はかなり「ずぼら」。自分勝手に、近年は棲みかである地球環境を、メツチャ破壊し過ぎ、子孫の安住の星とは言えなくなってきた。

人類も自然の一部。地球上のすべてを我が物顔は厚顔過ぎる。地球は子孫からの預かりもの…と認識し、資源を枯渇するまで略取することは、未来の子孫が享受できるはずの「命の糧」を奪い取ることになり、それは種の滅亡へと繋がる。

世界は、経済競争に、いい加減この辺で歯止めをかけ、スローライフを重んじ、子孫から喜ばれる環境を、しっかりと築きあげていきたいものである。

2006年6月「ふるさとルネサンスの会会報」としてスタートした本会報は、第11号から「ふるさと・風」と名を変え、前月第60号を迎えた。全員が毎月一度も欠けることなく、営々と続けたその情熱に敬意を表する。「継続は力なり」とよく言われるが、先輩達の努力のお陰で、新たな次の一歩が踏み出せる。

私は第19号から参加したが、過去の投稿を振り返ってみると、よくもまあこれほどまでに、独善と偏見を顧みず吠えまくったもの。現役時代、公務員として、言いたいことも言えず、脳味噌が腐るほど長い年月、雌伏の時を過ごしたその反動か？ 古希を過ぎ、何に臆することもなく、歯に衣着せず、高唱を続けたい。今や青春満開。

今回の原発事故は、自然の脅威を「想定外」では済まされない。想定外とは、当事者の知識が不足か、又は自然を見くびったかのいずれかだ。今回は傲慢な後者だ。聡明な次世代は、謙虚な反省からのみ生まれる。今後、人類の奢り高ぶった物質文明偏重の傾向に、歯止め的重要性を主張し続けて行きたい。

人間も、DNAという利己的な遺伝子に、生存の根幹を支配され、弱肉強食の野生の本能から逃れられない。どんな高尚な理念を掲げてても所詮は、「己の利」に貫かれ、生存競争を生き抜いて行く。

長い人類の歴史がそれを証明している。その最たるものが〇〇大王とか、△△皇帝である。己の欲望を満たす為、強力な武力で周りを虐げ、王国を築きあげる。権力の象徴として巨大な構築物を建造する。一般庶民や兵卒は王のための消耗品となる。これが「知恵あるもの」ホモ・サピエンスの辿ってきた歴史だ。

産業革命以来、近代国家に民主主義が芽生え、市民に自由や平等がもたらされたとはいえ、十分とは言えない。歪な社会は厳然として存在する。今後人類は何に重点を置き、明るい未来のために、今、何をなすべきか：浅学ながら提言を続けていきたい。

日々感謝の気持ち

木村 進

このふるさと「風」の会が7年を迎えたという。会報も一度も休むことなく毎月発行され、85回目となった。よくまとまって続けてこられたもの

だと驚きの念を禁じえない。

私はその中では、昨年11月から会報に記事を書き出したまったくの新人です。

しかし、半年しか経たないのに、もう音上げかけている。続けて記事を書くのがどれだけ大変であるかがやっと感じ始めてきた愚か者である。それなのに会員の皆さんは7年も休まずに継続してこられたのである。驚くべきことだ。

私がこの会のことを知ったのはもう4〜5年くらい前のことだと思う。そのいきさつを少し述べておきたい。

この会が始まった時には、まだ隣町（かすみがうら）に仕事の関係で住んでおり、定年も近づいてきたのを機会にここ石岡市内に越してきたが、この町も9月のお祭り以外に特に目立ったこともなく、引越してきたばかりは、駅前の西友はビルだけが残り、中町の「高喜」は既になく、石岡信金も破綻して、街は鹿島鉄道の廃止予定が発表されて、存続運動の張り紙が目につく程度の寂しい街並みであった。

駅前といえどもあまり人が歩いていないのを不思議にも思ったが、これも次第に慣れ、半年もするとごく当たり前の風景が広がっているに過ぎなくなってきた。

その頃、数年前に定年が迫ってきていたため、学生時代の友人や同じ団塊世代と言われた職場の同僚たちとも徐々に定年後の第二の人生の話題が上がるようになっていた。

私も会社人間で仕事に明け暮れた日々を過ごしてきたが、一度病気で一ヶ月程度入院したり、職場での先が見えてくるにつれ、自分のための何かを見つけたければとの思いが強くなっていた。

そんな中、歴史の里と言われる石岡の情報を得ようとネット検索をしてみました。しかし、驚くことにほとんど肝心な情報はヒットしません。

行政を含め、この情報化社会に全くお粗末な記事ばかりが目立つのにあきれ果ててしまったのです。独自のドメインも取らずにぷららなどのプロバイダの下のホームページを行政機関でも平気で使っていたり、呆れるばかり。

そしてご多分に漏れず、行政の情報発信力の弱さを時々あちこちで愚痴って批判などもしていました。しかし、これもしばらくするとあほらしくなつてすぐに限界に達してしまったのです。

「おまえは偉そうにしているが、自分で何ができるのか？」「地元のことを悪く言って、それでいいのか？」「所詮よそ者だろう？」よそ者に何がわかるのか？」などと言われているように感じてしまったのです。

普通ならこれで頭を引っ込めて亀のようにじっとしていればいいでしょう。しかしこんな第二の人生ほどつまらないものはないでしょう。

その数年前から、個人や会社内部などでもホームページ作成を手がけ始めていたこともあり、地元の情報発信力が弱いなら、少しでも自分から情報を発信して、ここ石岡のことを日本全国の人に知ってもらいたい。石岡のおまつりが関東三大祭りというなら、他の場所から発信される情報量を上回るくらい勢いがなければ、なんでこの地が大祭りなどと言えるのか？ そんな気持ちで石岡の歴史案内のようなホームページ『1300年の歴史の里「石岡ロマン紀行」』を立ち上げたのです。それも「行政でやらないなら変わってやり始めてあげるよ。後から雨後の筍のように湧いてくる

までの先達をやつてあげるから後から付いておいで」などと今から思えば、鼻高天狗のような高慢な気持ちがあったのです。

そして名所旧跡と言われるところをくまなく訪れ、そしてその歴史を調べホームページに写真とともに掲載して行きました。それも他所の場所の人が、この地を訪れることを意識して「ロマン紀行」などというタイトルにしたのです。

私は他所の土地を渡り歩いてここに来たこともあり、また、仕事で海外も何回か訪れました。行政区分の「石岡」には何のこだわりも持っていないかったことで、かえって周りとの壁が取り払われ、大昔にこの地で過ごした人々の流れが見えるようになってきました。

これは思わぬ発見でもあります。地元の歴史文献などにかんがりの嘘や誇張が見られるように感じて気になるようになってきたのです。また街中にどっふりと浸かっていると「井の中の蛙大海を知らず」であることも見えてきたのです。

これは石岡に限ったことではなく、どこにでも見られるものですが、行政区分で境界線を超えると、もう1m先は興味の範囲外に置かれてしまい、継続した流れが見えなくなってくるのです。狭い行政区分で見えななくとどうしても偏った見方になります。まして生まれ育った場所は愛着もありますので、眞面目に見てしまい、地元を自慢したいという表現に偏ってしまうでしょう。

しかし歴史を見ると古くからの歴史があるからといって何の「自慢」にもなりません。歴史は事実であり、事実を明らかにして、それに対して後の人がさらに発展させて歴史が継続する。そしてそこに自慢すべき文化が開く。

ヨーロッパなどをみてもその通りなのです。文化が開かない場所は、歴史などはたんなるガラクタの塊に過ぎないでしょう。

そんな中、石岡から文化の創造をして情報を発信していこうというこの会の存在を知ったのです。そして、会には時々誘われてもいたのですが、持ち前の消極的な性格もあり、足を踏み出せないでおりました。しばらくして会報の印刷をする手伝いをはじめようになりました。

そしてしばらくしてから、「今までの会報をホームページで公開したらどうでしょう」という提案をさせていただき、私の方でホームページを作成させていただきました。そして、これはもう3年以上続いています。

しかし、どうも会員の皆さんの記事の格調が高く、とても私が記事を書くのは自信もなく、手伝い専門で皆様の集まりの席に呼んでいただいております。最初は気楽に、皆さんの話も興味深く「面白い・面白い」とズルズルと会費も払わずに「手伝っているからいいだろう」と厚かましく構えていたのですが、やはりどうにも居心地が悪くなってしまう。会員の皆さんは良い方ばかりで気楽に接していただくのですが、3年も会員でもないものが会の集まりに行くのが申し訳なくなり、仕事も暇になりそうな気がして、会に入れさせていただきました。会員の平均年齢が少し若くなったと喜んでいただきましたが、現実、仕事もまだ結構忙しく、新たな仕事も挑戦したりしていますので、結構暇がない状態が続いております。

これは忙しいの言い訳に使って、自分の役割を軽減しておきたいというずる賢い考えがあるの

ですが、前に書いたようにこの記事を継続する難しさをつくづく感じて、半分は後悔の気持ちを何とか堪えております。まあ、今回も原稿締め切り間際に駆け込み記事を書いている次第です。

7年の継続とは本当に皆さんはすごい！

さて、私が石岡の歴史に少し興味を覚えたきっかけを少しここで紹介させていただきたいと思えます。

大和朝廷が、律令制を全国に始めたころ、ここは常陸国でした。そしてその常陸国の国府がこの石岡に置かれていました。そして奈良を中心とした畿内から全国に7つの街道がそれぞれの国を結ぶために連絡網として整備されました。常陸国は東海道(畿内からは東側の海沿いの道の国に属しており、ここが終点になったのです。そう古東海道の終点都市だったというわけです。当時は東山道が仙台の先、多賀城まで伸びておりましたが、まだ東北は大和朝廷の権威が及んでいなかったのです。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

その古東海道が東京湾を海で渡り、上総の国府（市原）から下総の国府（市川）を経由してどうやってこの常陸国国府に来ていたのが皆目わからないのです。時代によって様々に変化したようですが、広大な内海であった流れ海（霞ヶ浦）を船でわたっていた時代もあつたはずですが、その痕跡がその地にのこる伝説であつたり、地名であつたりすることに気がつき、いつの間にか古代の声無き声を聞き、風の音や日差しを感じて古いものを訪ねて歩くうちにすっかりこの地の魅力にはまってしまったのです。このことはこれからもまた書く機会があると思いますので、詳しくはまた別な機会に譲りましょう。

この風の会は、会員といつても7人ほどしかない小さな会ですが、皆さんが自分というものをしっかり持って発信している誇り高い人で成り立っています。それが7年も変わらずに続けて来られたのですから、これは石岡の誇りです。

映画監督でもあり脚本家であつた白井先生のご指導がなくして継続はできなかったことでもあります。私はまだ自分を磨かないと、しっかりとした自己主張ができませんが、少しづつ諸先輩をみて盗みながら成長できるのをこれからも楽しみに続けていきたいと思ひます。

最後に、私のホームページの別バージョンであるブログ「まほらに吹く風に乗って」も今年の8月で3年を迎えます。毎日ブログを休まずに更新しておりますので、機会があつたらそちらも覗いて見てください。今、こちら（ブログ）は1000日を越え、三年の目標に向かつております。休まずに書き続けることは至難の業であることを実感しています。自分の意思のみでやめたりもできる

状態ですから、これって結構孤独な戦いなのです。

しかし、これも継続することで、自分の意識も高まるし、仲間も増えてくるのを感じています。生きがいでもあり、嬉しいことでもあります。

調べたり、写真を整理したり、時間が足りません。おかげで第二の人生は、文句を言う暇もなく、忙しく過ごせており、今では、会員の方々を始め、様々な人に感謝する日々です。

文明の暴走（1）

菅原茂美

「文明」を生み出した人類とは、一体、何者だ？

直立二足歩行する奇怪な動物。大脳を、ヤケに膨らまし、神の概念まで生み出しながら、他者のそれは認めず破壊する。慈悲深さと残忍性を併せ持つ。この惑星を支配するリーダーかと思えば、単細胞の微生物に命を狙われ、常に戦々恐々。誰かが抜きん出て繁栄すると、必ずその足を引っ張り、天下をひっくり返す。そういう歴史の繰り返し。それが人類という動物の通常の行動と見受けられる。

まずその人類とやらの誕生の過程を振り返ってみたい。哺乳類は2億年前の三畳紀に爬虫類から進化した、恐竜が滅亡した後、急に大繁栄を遂げた。温血で胎生、皮膚腺の変化した乳腺からの乳汁で仔を育て、大脳が発達して複雑な行動を取る。

その中でも、特に霊長類（サル目）は、2500万年前モグラ目（食虫類）から分離し、知能を高め、ついに700万年前、チンパンジー・ボノ

ボの共通祖先と枝分かれして、直立二足歩行する真に特異な生物種「ヒト」が誕生した。

【モグラ叩きは、ご先祖様の頭を叩く不謹慎な行為。出る釘を叩くのは無能な権力者が自分の地位を奪われまいとする姑息な手段。大学入試で、センター試験成績の「足切り」は、未来の才能の芽を無惨にも摘み取る愚かな行為。】

さて今から6500万年前、中米ユカタン半島に、直径10kmの小惑星が衝突した。えぐられたクレーターは直径は200kmもあり、舞い上がった大量の塵灰は、成層圏にまで達し、長期間にわたって地上に太陽光は十分に届かなかった。そのため、地上の植物は壊滅的打撃を受け、肉食恐竜がまず死滅し、肉食恐竜も当然生きていけない。

このように地球上の全生物種のおよそ、九割が死滅した大事件は、地球の歴史上、5回も存在する。ところがその頃、恐竜に怯えながら、チョロチョロ這いまわっていたネズミ大の哺乳類の元祖は、運よく生き延び、開いた空間で一気に勢力を伸ばす。強者の衰退は、弱者の繁栄を引き起こす。『奢れるもの久しからず』は、人間世界だけの話ではなく、全ての生物に共通した現象である。

さて直立二足歩行を始めた人類の黎明期は、最初から脚が長く、知能が発達していたわけではない。森林の後退で、やむを得ず樹上生活から、地上に降りた人類の祖先は、最初は、四足歩行であつた。身長は、1.5m位。大脳容積は500ccそこそこ。そのうち、前足の片方で食べ物など何か手に持ち、或いは子持ちのメスは子供を片手で抱え、もう片方の手は、握りこぶしの指の脊側で接地（ナックルウォーク）し、いわば3本足の形でしばらくは歩行していた。勿論、木上りは上手で、その

証拠は、直立した後も、足の親指は手と同様、他の4本の指と大きく離れていた。

こうして長い年月をかけて、大腿骨と骨盤の構造改善がなされ、直立に成功したものと思われる。そしてついに、両前足は体重を支える事から解放され、体重は、全て後ろの2本足にかかることになった。

その後の人類の「手」を見ると、生存に必要な道具を作り、楽器を奏で、しなやかに舞い踊り、絵画・彫刻・建築など文明繁栄の基礎を築きあげた。が、無限に広がる「欲望の拡大」は、ついに大量破壊兵器など悪意の道具の開発に、全力投球し、その愚行に歯止めがかけられない。万物の霊長どころか、地獄道を突つ走る哀れな生き物へと進化(退化)し続けている。

【過去にも触れたが、人類は地球の引力に逆らつて、直立二足歩行を始めたために、多くの不具合を生じた。体重負担は4本足であったのに2本足になったので、膝関節にかかる負荷が大きく、老化して軟骨が、すり減つてくると「膝関節痛」を引き起こす。4つ足なら「後大静脈」は地面に並行なので、肛門部に鬱血する事は少ないが、直立したために、肛門部の静脈血を心臓まで引き上げるのは容易ではない。それゆえに「痔疾」を引き起こす。「臍・鼠径・椎間板ヘルニア」も直立による上部体重の圧力からと考えられる。更に細長い胃袋も、地面に並行なら問題ないが、直立したために、垂れ下がり、「胃下垂」などを引き起こす。4つ足なら、かなりの重量の頭部は、首の前にぶら下がる状態だが、直立したために、頭部は7個の頸椎の真上に乗っかっている。その重みで頸椎軟骨は潰れがちで「頸椎症」となる。そのため、

多くの人は「肩こり」などに悩まされる。同じような事が上半身の重みを腰部の椎骨が一手に引き受ける事になり、殆どの人が「腰痛症」に悩まされるハメとなった。

そして直立したため、最大の不具合は、「未熟児出産」。理由は直立により骨盤が狭くなったため、大きな胎児の頭部が産道を通過するためには、胎児全体が成熟しては真に不都合(今、米国では3分の1が帝王切開出産)。草食獣など、生まれてすぐ立ち上がり、走らなければ肉食獣の餌食となるため、かなり成熟してから生まれる。しかし人類は、大脳が大きくなったために体全体は未熟で出産し、長い保育期間を要する事になった。生殖年齢に達するまで、親に依存する動物は他にはない。その他、直立の反動として、「立ちくらみ」、「脳貧血」など数え上げたらきりが無い。

《要するに進化とは、適者生存のために、定向進化するものではなく、何かに向かつて走り出したら、生存に有利であろうが無かるうが、ムチャクチャに突進する傾向がある。フランスの分子生物学者でノーベル賞受賞者のフランソワ・ジャコブは『進化は、へたくそな細工師だ』と述べている。ダーウインの進化論発表までは、生物、特に人体は、創造神でなければ、これほど完璧には造りえないとする考えであった。しかし、ダーウインは「種は極めて簡単な原始生物から進化してきたもの」としたが、進化は適者生存とは限らず、不適合な方向に、やみくもに突つ走る傾向もみられる。

例えば滅亡したが大角鹿は、体長3・1m、角の差し渡しは、3・6m、角の重さ50kg。これでは生存にむしろ不利。木の枝に角が挟まり、身

動きできず餓死などする。現存するヘラ鹿なども似たようなもの。絶滅危惧種は、生存に不利な多くの悲運を背負っている。私に言わせれば、人類の大脳肥大化も、絶滅への赤信号。》

こんな現象を見ると、猛獣がうろつくサヴァンナで、人類はより早く敵を発見し、危険から逃れるために、目や耳を高い位置に据え付ける必要があった。そのため短足でも、伸び上つて、より遠くまで見渡せるよう、自然と直立するようになっていない。長足は生存に有利に働くと深い層心理が、現代の脚線美称賛へと繋がった。直立は多くの利点をもたらしたが、その支払った代償も莫大なものである。】

さて人類の大脳の容量は、進化の年月と正比例で増大していったものではない。最初は今チンパンジー並で、500cc未満である。それから500万年かけてわずか150cc増えた。初期人類の石斧は100万年も変化することなく同じ形であった。

* * *

現在、人類発祥の地はアフリカ中部・チャドあたりと考えられている。2002年、国際調査団がチャドで人類最古の化石・「サヘラントロプス・チャデンシス」を発見した。化石人類は今まで9段階のヴァージョンアップを重ねて今日に至ったと考えられている。700万年に種として9代の世代交代。1代当たり平均すると78万年ということになる。初期のアウストラルピテクスは170万年も永続したが、最後のネアンデルタール人は、わずか27万年前で滅亡した。現存する人類「ホモ・サピエンス」は今から20万年前「ホモ・エレクトス」原人から生まれたが、兄貴分のネアンデルタ

ール人の「種の寿命」は、わずか、27万年であったので、弟もそれと同じと仮定すると、我々人類の残された種の寿命は、あと7万年ということになる。現在世界人口は70億人。地球が1・4個必要といわれる。毎年8500万人も人口が増え続け、このままエネルギー消費を続ければ、環境汚染・資源枯渇などで、人類の種としての残りの寿命は1万年とも言われる。それゆえ、日本の原子力規制委員会は、活断層の概念を40万年前まで遡るとするその心理が、私には理解できない。規制は、何でもきつく設定すればそれでよいというものではあるまい。日本は消費者の声高の要求に応じ、BSE（牛海綿状脳症）の規制基準を、かつて世界の常識を外れて極端に高く設定した。そのため自殺者も出た。世の中が静穏になると、本年2月、サツサとその高基準を取り下げた。政府は一部過激な消費者に追いまくられ、世界の基準を無視した。国政を預かる者は、もつと冷静に、広視野で物考えろ！

* * *

さて現在の人類の脳容量は1400ccだが、急に増えたのは今から40万年ほど前、人類は初めて「火」を自由に操れるようになってからである。200万年ぐらゐ前の獣骨化石に炭化の跡があるが、これは山林火災などによるものと思われ、はっきり人類が火を起し、食べ物を加熱して食べた証拠は、40万年前頃と言われる。その時点で大脳容積は900ccである。加熱した食品は、消化が良く、安全性も極端に増加した。粗繊維の多い固いものを噛み砕くためには、下顎骨と頭頂部の「矢状稜」とを結ぶ多くの咬筋が必要となる。ところが加熱により、食べ物が柔らかくなったため、

咬筋は減少し、頭蓋骨の矢状稜（ラミダス猿人までは存在する）は、不要となり、頭頂部の骨が薄くなったことにより、内部の大脳容積は容易に増大しやすくなった。火の使用により、わずか40万年で500ccも増え、現代に至る。人類の最大の革命は、「火起こし技術の獲得」という人もいる。なお、大脳は大きければ頭が良いというものではない。1800ccの知的障害者もいたし、1921年ノーベル文学賞のアナトール・フランスは、40万年前の原人並みの1000ccであった。こうして人類は何百万年もかけて大脳を膨らまし、単なる生存のためだけの生活から、星空を眺め、理想郷を夢見たり、大狼を折つて洞窟壁画を描いたり、愛おしき相手を口説くための言葉を生み出したりした。

大脳が発達すれば、それだけ創意工夫がなされ、日常の生活が高度化し、安全性も増えていく。特にワクチンや抗生物質の発明は、感染症の世界的大流行（パンデミック）を防止し、人類の滅亡を未然に防いだとも言える。更に、芸術の発展やインフラの整備も生活の利便性を増加させた。

* * *

こうして人類は生活が安定化すると、良からぬ野望が頭をもたげ、際限なく欲望は膨らみ続ける。即ちオレの物は俺の物。人の物もオレの物。略奪やら侵略など規模は拡大していく。コソドロまではまだ目をつぶるとしても、他国に侵入して先住民を殺害し、或いは降伏させて奴隷化し、他国を乗っ取る現象は歴史上多く見られた。南北米大陸には、コロンブス以前に9000万人の先住民がいた。しかしヨーロッパの白人共は彼等の九割を殺害し、残りは片隅に押し込め、丸ごと奪い去つ

た。

特にスペインの探検家ピサロは、わずか1800人の軍隊で、1532年インカ帝国を滅亡させたが、その戦略は、相手を同士討ちさせ、ヨーロッパの感染症を蔓延させ、徹底的に制圧した。そして女を略奪し、その子孫としてメステイソ（白人とインディオとの混血）が今日、ラテンアメリカ人口の大部分を占める。私は中米滞在中、メステイソに、インディオと白人のどちらの血を誇りに思うのかと尋ねたら、いずれも『そりや当然白人さ』と、私の意に反する答えが返ってきた。勝てば官軍。負けた方は歴史から消し去られる。

マヤ文明の遺跡を訪ねたら、白人共が破壊したむごい傷跡が無数にあった。これは世界の至る所で見られた侵略の現象である。先住民の宗教など邪教として簡単に切り捨てられる。

一方我が国では、大和朝廷の蝦夷侵略もまったく同じ。蝦夷に同士討ちさせ、坂上田村麻呂や源義家など、軍神として祀られるが、負けた側から見たら苦々しい限りである。平穩に、ささやかに自分達の生活を守っていた未開の人たちを、文明の進んだ民族は、虫ころを捻りつぶすように虐げていく。これぞまさに「文明の暴走」だ。

人類は、このような歴史を繰り返してきたのだから、いい加減この辺で目を覚まし、侵略が大罪であることに気付き、欲望の暴走に歯止めをかけ、平和を実現できないものか。国連という公的な機関が何のために存在しているのか。横暴な国の暴走は、国連がしっかり制圧する機能強化が、なぜできないのか。世界各地に見られる、特に領土問題など、大乗的見解で、譲り合いの精神がなぜ発展しないのか。

ホモ・サピエンスとは「智慧ある人」という意味である。21世紀にもなり、国際交流も盛んで、「人類はみな兄弟」という概念に真つ向反対する人はおるまい。平和で住みよい世界を実現するため、折角膨らました大脳をフル回転させるべきである。今回は「暴走」の現場へ突入する。

中町の日本武尊さま

兼平智恵子

石岡のおまつりに華やかさを誇る山車の上に乗る人形についてご紹介しています。

今回は中町の日本武尊さまです。石岡駅から真つすぐ西方に延びる八軒道路(御幸通りともいわれている)を進みますと国道三五五線(旧水戸街道)との三叉路に交わります。右折をしますと先に(本会報七九号)ご案内しました香丸町の聖徳太子さまの町並に入り、左折をしますと今回ご紹介します中町通りに入ります。ちょうど左折の角にまちかど情報センターがあり石岡についての情報や色々な催しが行われ多くの方が訪れています。

府中平村と呼ばれた江戸時代には水戸街道の宿場町として明治、大正、昭和は酒、醤油の醸造工場と製糸工場、桐材工場と商業都市として栄え、中町、香丸町は、その中心的商店街として繁栄を誇っていました。しかし昭和四十年代頃より官庁街そして他の地方都市と同じように幾つもの商店は郊外へと移り、人と物質の流れがかわり往時の輝きは難しくなっていました。

現在の中町は昭和四年三月に大火災に遭遇し、翌年の復興で建てられた、しやれた洋風の看板建

築の建物が登録文化財として中町通りを中心に保存され、昭和のレトロな雰囲気醸し出し訪れる人の心をなごませてくれています。

このレトロな雰囲気塗替えられる三日間石岡のおまつりです。今回の日本武尊さまにつきましては、石岡ひな巡りで古いおひなさまをお持ちで話題の中町のこまつや様を尋ねましたところ、偶然にも日本武尊さまの修復が完成し、二日後の五月一九日紫苑脇駐車場にてお披露目があるとのことでした。

幸運でした。こまつや様は「ともかくにも、幕末から明治時代に活躍した江戸を代表する人形師 三代目 法橋 原舟月の素晴らしい人形であり、今回の修理依頼は、京都に在住する元京都国立博物館職員であった田中保氏で、田中氏は同博物館で国宝等の修理を手がけ、各専門技術に精通しており、今回の修理をお願いし、原舟月作と同一の材料で修復してもらい半年かかった」と熱く語り、資料を下さいました。

二日後お披露目の日、少しの時間でしたけれど拝見することが出来、カメラに納めました。その後同町内の村山様からも町内で人形を管理なさっている萩原様をご紹介頂き、作成中の資料の一部を見せて頂いたり、お話も伺う事が出来ました。

明治二九年購入後一回目は昭和三六年、埼玉県越谷市の人形師渡辺与市氏によって改修され、二回目の今回は町内会皆さんの、原舟月制作当時のものに復元したいという強い願が叶ったそうです。また、今を遡ること約九十年の昔、当時の中町の若衆十数名が三階建総櫓造りの商人街中町に相応しい山車を造ることを計画、ほんの微々たる小遣いを儉約して積立を始めた。そのことを知った

町内の旦那衆の協力があつて製作にかかったと言ひ伝えられているそうです。

今回の修理は石岡市文化財修理補助事業の一環として石岡市からの助成があつたようですが、膨大な修理費を六十八件の皆さんが積立てなさつての人形に寄せる思いと気迫には驚くばかりでした。明治の世に小遣いを儉約して積立てをした当時の若衆と明治商人旦那衆の心意気が脈々と引き継がれていると納得できました。中町の宝であり石岡市の宝でもあると思えました。

九月のおまつりには、紋綸子に本金糸の縫い取り刺繍・胴正面に出てくる龍紋の刺繍等日本武尊さまの衣装に注目です。

古事記には「倭建命」、日本書紀には「日本武尊」、常陸国風土記には「倭武天皇」として登場しています。古代伝説上の英雄。景行天皇の皇子。本名は小碓命。常陸国総社宮内に日本武尊さまのお座りになられたという岩が有ります。海神の怒りをなだめるため、我が身に代わつて海に投じた弟橘媛を思い出していたのでしようか。それとも都を懐かしんでいたのでしょうか。

こまつや様、村山様、萩原様惜しみない資料のご提供とお話を有り難うございました。

・深緑に握手 青空覗いてる 智恵子

母の日

伊東弓子

里山も雑木林も小高い山々も、木々の新芽の輝きが独特の美しさを醸し出す。その姿を写す水辺

にも耕作する人々の前にも大地の草々が何百、何千という新緑の彩りを誇っている。そんな自然界を余所に喜んだり、羨みがましく思ったり、がっかりしたり悲しんだりと心が揺れ動き、五月ならではの話題が聞えてくるのも人間界だからだろうが。

テレビ、新聞あらゆる情報で派手な宣伝が始まる。「母の日のプレゼントに……」お母さんにどうぞ「暖かい心をお届けしては……」と賑やかに巧みな言葉に、年令の高くなった女達の心が揺れる。勝手だろうが不安になったり、希望をもったりする中で「自分」「母親」の存在をどう評価してもらえるか期待する。口に出せない心の奥底で静かにその日を待つ気持ちの辛さ。

そういう気持でいる時には、其処此処で女達の声が入ってくる。悲しい現実あり、ほほ笑ましい状況ありみんな受け止めていかなければならないことだ。

鉢物の一つを手に取りながら（これでいいわ。格好だけ作ってやればいいのよ）と水分不足のカーネーションの花を買っていった人。

（商業ベースに乗って買う必要もないよ）と二人で通り過ぎて行った。

（お婆ちゃん孫達といつも一緒に、気持ちを休める暇もないから、ゆっくりお茶して貰おう）と和菓子を買って行った人もいた。

（いいのよ。年金貰って不自由していないんだから、特別上げる必要ないよ）（何も考えていないよ）（いちいちそんな事してられないよ）と三々四人のグループが通り過ぎた。

（私は実家の母に、お父さんは自分のお母さんに上げればいいじゃない）と嫁さん同志が喋り

ながら前を通っていった。『嫁さん何て言ったら、文句でも言いかねない二人』

自慢比べの様にお喋りする姑族もある。

（今風の服を買ってきてくれたわ）

（年をとったら靴は軽いのがいいと買ってくれた靴の履きやすいこと）

（在り来たりのカーネーションの鉢を、置いていったわ）

（いやいやでつかい箱に入った物くれたけど、後の塵片付けが大変だった）

（貰えなかったのは一人前でないようで、悲しくて悔しかったよ）

（欲しくないと言ったら嘘になるよね。みんながブームに乗ってるんだから私もそれにあやかりたいわ）

（私って特別な。こんな事思うのは醜いよね）
こういう娘、嫁さん、母親、姑さんの話しを聞きかじっただけで判断する事は出来ないが、お互いに心の通い合いがない様に思える。私の嫁時代はどうだったろうと思いついてみた。

姑を思うと悲しくなる。物を貰う事があまり好きではないという。負担を掛けまいとする気持ちからだったと分かったが、その頃の私は残念に思えた。今の私には姑の気持ちも分かるような気がするが、今の私は嫁さんから貰う物は嬉しいと受けた。姑は忙しい毎日だからこそ、ゆっくりお喋りしようと思望していた。話を聞く時間をもつ事が何よりの贈物だった。幼い頃の想い出。父親の銀行の支店が閉鎖になった時の苦勞、教員時代の情熱、子育ての楽しさ、転居が多かった事、舅を亡くした後の苦勞、塾を開いてからの生き甲斐、その他尽きなかった。そういう姑をおいて別

の別に暮らし好きな仕事を続けた事を申し訳なく思っている。勝手を通してしまった事は今でも辛い気持ちを思い出させる。週二度が一度になり、月に二度が一度になり、正月と盆、舅の冥日、春秋の彼岸と年に十日余りの帰宅となった。どんなにか待っていたらう。この年令になって姑への気遣いや言葉かけがやっと分かってきた思いだ。

同年の集いで話題の一つは若い人との係り方、言葉かけ、気遣いについてだ。

「私が死んで今の若い人が今の私らの年令になった頃、今の私らの思いを分かってくれるようになるよ。それまで待つ事にしよう」と話しを終わらせるのが常だ。

母を思うと申し訳ない気持ちでいっぱいだ。それは心配のかけどおしだったからだ。幼い日の事故。自分の力量に持ちきれない程の事を請け負い、まとまらず人の助けを借りて仕上がるという腑甲斐なき。優しい母に常に反発して好き放題な事をして来た私。亡くなった今も心配し続けているだろう。そんな私は母にどんな心遣いをしてきたろう。妹と村内の藤を見に出歩いた事は喜んでくれた。贈物は素直に喜んで受けとってくれた事だった。それが嬉しかった。母に対して罪多い私も母の願いの一つを強い信念を通してやりとげた事は胸を張って報告できる。母はきつと「ありがとうね」ということだろう。

保母という仕事を通して、一日の三分の一の時間を母親代わり役目を担ってきた。母親と子供の間にたつ保母は、子供を守る側でものを言い、話しや歌をとおして母と子のつながりを大切に接してきた。

お母さん なあゝに

お母さんって いいにおい
洗濯していた においでしよう

シャボンの 泡のにおいでしよう

母親の姿も少しづつ変っていった。野良着の俣走って迎えに来ていた姿から勤め姿に変っていった。やがて車時代に入り時間的に短縮出来た筈なのに「早く早く」と急がされ、小言が多くなった。母と子をつないでいる糸が一本一本切れていきそで心配だった。こんな歌で訴えた事もあったが批判されたことだろう。

お母さん なあくに

お母さんって 何のにおい

お酒を飲んでた においでしよう

煙草を吸ってた においでしよう

聞く耳も持たず、時代の流れの中で母親達も自己表現が言動に、化粧や衣服に力を入れ始めた。子供を忘れていませんかと言いたかった。現代は携帯電話が優先して子供との会話よりメールおこしに忙しく歩いている。料理の味もどうか台所でもメールの発信に忙しい。子供達はどうなる…と叫びたい。

あるお宅のお通夜の晩、八十歳を過ぎた老人が六十歳の息子の死を乗り越えようとして話してくれた。

「息子が先に行くなんてこれ程悲しいことはない。親となった以上この状況を何とか越えなければならぬ。子供を産んだ親は親業を捨てる事は出来ないんだ。貴女も苦勞が多いようだが頑張つてな」

と励まされた。『親業』を覚えてくれたあのお爺さんを今も忘れない。

そういう親業真盛りの私はどうだったろう。保

育園に通う頃は、小さな手で作ったり、描いた贈物がどれ程嬉しいかったか。私の為に用意してくれた物、そこに私の存在が確実にあって疑われない喜びだった。小学校時代の子供達はカレーや玉子焼きを作ってくれた。少ない小遣いの中から菓子を買ってくれたり、競つて肩を揉んでくれた。「母の日の手伝」は普通以上に多くの仕事をした。まだまだ素直な子供達に包まれて幸せを味わっていたが、子供達の抱えていた問題を分かつていたろうか。中、高生になると母と言う存在も影が薄くなった。娘達からの贈物は当りまえの様になり、息子は形にも表さないし、声にも出さず、心は見えなかった。これは自然なのだろうと考え、貰っても貰わなくても特に感じる事もなかった。こんな気持ちの移り変わりを文章にするのも恥づかしい限りだどつくづく思う。

私の「母の日」の原点は遠くなった終戦直後の小学校時代にある。「お母さんを称える」という行事で人が沢山集まっていた。母親よりお婆さんの方が多かったように覚えている。始めに「お母さんを称える歌」を全校生徒で歌った。

母こそは 命のいずみ 人の世に

あらん限り ほほえめり

天津光 大いなるかな 母の姿

今となつては歌詞がはつきりしないので（存知の方教えて下さい）ゆつくりとしたリズムで、優しさが伝わってくる歌だった。言葉の意味も分からなかったが、お母さんを思う気持ちが膨らんで得意になつて歌つたものだ。歌の後「お母さん」という題で、何人かの生徒が作文を読んだ。何がそうさせたのか低学年の私も強い感動を受けたのだらう、涙を流している自分がある事を確認

りと覚えている。

今祖母となつて「母」という字がつきまどっている。母親よりで過ぎず、親業は忘れずに若い人や孫達と生活していこう。朝机の上に置かれていた原稿用紙に今月の原稿を書いている。原稿用紙に手紙と一輪の花が添えてあった。手紙には「弓子さんも頑張つてネ！」と書かれてあった。夕方は嫁さんからのクッキーが届いて、次の日紫がかった花の鉢を届けてくれた娘とお茶を飲んだ。欲深い婆さんに幸せが届いた日だった。

生涯の中で今でも胸を熱くする一輪の赤い花、心を病んだ後仕事について初めての母の日に「ほら」とくれた息子の明るい表情と気持ちは忘れられない。

茨城の妖怪

小林幸枝

日本の妖怪に興味があつて本を買った。そうしたらそこに悪路王が載っていた。悪路王が何で妖怪なんだと、少し納得がいかない。

茨城の妖怪は「イクチ」と「累」でした。

イクチとは、海の妖怪で、江戸時代の随筆、津村涼庵の「譚海」や根岸鎮衛の「耳袋」にその記述があります。

涼庵の「譚海」によれば、常陸国の沖にいた怪物とされており、船を見つけると接近してきて、船をまたぐように通過していくという。体長は数キロメートルにも及び、通過するのに十二刻もかかるという。体の表面からは粘着質の油が染み出でていて、船をまたぐときにこの油が大量に船に

落としていく。船乗りたちはこの油を汲み取らないと船は沈没してしまうのだと書かれています。

「耳袋」ではイクジの名で書かれており、西海から南海にかけて時々現れて、船の舳先などにかかるものとされている。ウナギのような形をして非常に長く、船を通過するのに二、三日もかかる」とあり、「いくじなき」という俗諺はこれが揺らいだとも言われています。

またこの耳袋では、ある人が「豆州八丈（現在の八丈島）の海に、イクジの小さいものと思われ、目や口がなく動いているものなので、船の舳先へかかるものも、長く伸びて動くのではなく、丸くなって回るものだ」と語ったと書かれています。

最近、伊豆などで不思議な深海魚が網にかかったりしているニュースをみますが、深海に棲む十メートルを超す大水イカなどを始めてみたらヌルヌルと油が出ている様に思うのかも知れません。平べったくて長い深海魚などもいるので、そういう深海魚を始めてみた昔の人達は、妖怪のように思ったのかもしれない。

来月は、「累」のことを調べてお知らせしましょう。

ふるさと風が先月号でまる7年となり、今月号からは8年目に入ります。という事は、「ことば座」は10月で7年になる訳です。

ことば座の7周年記念の公演は、東京のシアターXで言うことになります。6月の定期公演が終わった後、東京公演の稽古が始まります。今からわくわくしています。

【特別企画】

虚構と真実の谷間 打田昇三

第五章 怪しげな対決（3）

石岡で知名度の高い平国香は源護の後任者として源護と縁組を深めつつ常陸国内に領地を増やしていったのであるから「国香が常陸国府で勢力を誇っていた」とか「長官として活躍した」などということは無いのである。大掾職は国府の判官職（正七位下）に過ぎないのであり、軍人に例えれば下級将校と同程度の地位でしかない。地元歴史にも伝えられた「嘘」が有ったようなので正して置かなければならないことである。

嵯峨源氏のほか仁明、文徳、光孝、清和、宇多、陽成、冷泉、村上などの源氏があるが武士として延びてきたのは清和源氏である。ただし宇多源氏の子孫は源頼朝の忠臣となった佐々木一族など地方の武士として定着しているし、源頼朝の部下で鬼退治に活躍した渡辺綱は仁明源氏と言われる。

平氏のほうは皇族から臣籍に降下する者に与えられる姓（かばね）の一つとされ桓武、仁明、文徳、光孝の四流しか無い。このうち、武士として伸びて来るのは桓武平氏であるが、これは桓武皇子の葛原親王から出た高望王の子孫であり「地下（じげ）平氏」と呼ばれる。是に対して高望王の兄で、先に皇族から離れた高見王の系統は「堂上平氏」と呼ばれて藤原一族の風下に立ちながらも公家として活躍している。後に平清盛の父親・忠盛などが立身出世を目指して努力するのも「地下からの脱却」が念頭にあったからと推測される。

さて平安時代の後期、藤原氏の摂関政治も終り

に近い頃に栄華の象徴として完成したのが宇治の平等院・鳳凰堂である。天喜元年（一〇五三）三月のことであるが、その年の六月十一日には藤原道長の正室・源倫子が九十歳の長寿を全うしてあの世に旅立った。この女性は宇多天皇の孫か曾孫にあたり、紫式部を宮中に出仕させたのもこの人だったと思う。本来ならば天皇・皇族のお妃に充てられる筈で、冷や飯食いの藤原道長が結婚を申し込める相手では無かったのだが、丁度、適齢期に相応しい婿さんの出物（失礼）となる皇族が居なかった。それを狙った藤原道長が図々しく結婚の申し込みをして「身分違いをするな！」と怒らねながらも辛うじて「宇多源氏」の婿になることが出来たから道長が出世したのであり、単に悪運が強かっただけなのである。

倫子さんと違って、悪運だけで世の中を掻き回した道長は、多くの人々を苦しめたため晩年には怨霊界から指名手配されて、人間らしく大往生を遂げるには自分で建てた法成寺という寺院に籠らなければならなかった。多分、この寺の造営のために公務が後回しにされたらしいから罪は余計に重くなる。怨霊に裁いて貰う迄もなく、とても極楽に行ける筈は無かったのであるが「宇治拾遺物語」には法成寺を建立した功德で救われた「嘘」が載せられている。近年の妖怪シリーズで有名になった阿倍晴明が占って道長が難を避けたのだが替わりにインキキ占いのお蔭で、道長の従兄弟で左大臣の藤原顕光が悪人にされてしまった：

法成寺は治安二年（一〇二二）に建てられたのだが、藤原道長は如何にも殊勝な人物を装って毎日のように寺参りをしてきた。本当は自分が建てた寺が自慢で、政治を放り出しては来て居たので

ある。その頃、道長は一頭の白犬を飼っていて何時も外出にはその犬を連れていた。或る日のこと輿車から降りて何時ものように山門をくぐろうとした時に白犬が急に吠え出した。それも道長の行く手を遮るようにして吠え立てている。不審に思った道長は、供の者を走らせ陰陽師の安倍晴明を呼び付けて占いをさせた。これも公務員として公私混同であるが目を瞑るとして、呼び付けられた安倍晴明は、怨霊が鳴りをひそめ仕事が減つて来た頃であるから「ここぞ！」とばかり厳肅に訳の分からない呪文を唱えてから言った。

「：畏れながら、これは一の上(道長)を呪詛(じゆそ)せんと、何者かが呪物を埋めて居るものと存じます。此処に近寄られることは悪しきことにござります。――脛(すね)に傷持つ道長は呪詛される覚えが山ほどあるから慌てて聞いた。」それは何処か？早く探し出せ！：いよいよ本領發揮のチャンスを与えられた晴明は、本堂の回りを探すうちに「此処にござります。：」と言つて場所を示したので、道長が掘らせてみると、黄色いこよりで十文字に括った土器が出てきた。

開けてみると何も入っておらず、土器の底には朱色の文字で怪しげな文字が一字だけ書かれていたが読めない。「これは何の意味ぞ？」道長の問いに対して晴明は「この文字は呪詛の文字であり、私以外に知る者は居ない筈ですが、或いは蘆屋道満(あしやどうまん)伝説的な陰陽師、帰化人系・秦氏と言われ、西国に伝承が残る)ならば書けるかも知れません。試してみましよう」と答える。

晴明は懐中から紙を取り出して折り紙よりも本物に似せて鳥の形を作り、空中に投げると白鷺に変じた。鷺では無く詐欺の様な気もするが、その

鳥が南を差して飛び出したので晴明は家臣たちに命じて鷺を追わせたところ六条の萬里小路(ままでのこうぢ)にある古家の枝折戸に当って落ちた。その家の中から法師が出てきたので捕らえられ、道長の前に引き据えられた。現代ならば何の証拠にもならないのだが「なぜ呪詛など致したか？」道長の尋問に対して法師(この人物が蘆屋道満である)はスラスラと答えた――出来過ぎ。それに依ると「左大臣に頼まれた」ことになる。左大臣とは、道長の従兄弟・藤原顕光なのである。

頭燈伊呂融天皇の皇后となった

の兄か弟なのだが、職務上のミスばかりが伝えられる人物で字も読めなかつたと言われる。それでも家柄だけで大臣になったのだが、ライバルの道長には常に馬鹿にされていたようで、恨んでいたと思われるから道長を呪詛する理由は有る。この事件で失脚したのであろう。それでも果敢に怨霊となつて道長を苦しめたい。根性は有つた。その頃は怨霊になる学科試験が無かつたから能天気な人物でも資格が取れたのである。やがて藤原道長が体調を崩し死に至る原因は此の人の怨霊の所為らしいから呪詛は失敗したが、死後の祟りは上手に出来た。この事件で呪詛を下請けした蘆屋道満は軽い処分済んだというのは関係者全員が怪しい。「嘘話」とも思えるが、紹介しておく。

話を少し逆戻りさせて申し分けなかつたけれども、藤原道長夫人・源倫子さんの死から一週間後に生まれたのが曾孫に当る白河天皇である。父親の後三条天皇は紫式部らが活躍した時代の一条天皇の孫になる。また一条天皇と道長・倫子夫妻の娘・彰子中宮との間に生まれたのが白河天皇の祖父・後朱雀天皇であるから源倫子の曾孫にもなる

のである。延久四年(一〇七二)の暮に、後三条天皇の第一皇子・貞仁親王は、成人式が済んで父帝の譲りを受け、第七十二代の白河天皇として即位した。やがて、この天皇はあらゆる面で中途半端な怨霊以上の活躍をすることになる。

まず、この時代には有力寺院に寄生していた僧兵が武力を頼んで威張り出し、東北地方では「後三年の役」が起こる。「前九年の役」で安倍頼時の制圧に源義家を助けた功績で大豪族となった清原氏の内紛であるが、この事件では源氏が積極的介入する。景氣の良い源氏とは対称的に、合戦屋としての平氏は未だ無名ながらも平忠常の乱から始まり東北地方の戦役に出陣した源頼信、頼義、そして八幡太郎義家と続く源氏の将軍に従つて出陣したのが常陸、上総、下総から下野、武蔵、相模など関東一円に広がった高望王こと平高望の子孫たちであった。この為に、東国に居た桓武平氏系の武士団と源氏との間には主従関係のような繋がりが出来ていた。特に相模国に居た平直方(平貞盛の子・維時の系統)が娘婿の源頼義に鎌倉を譲り、源氏が鎌倉を本拠とした関係から東国は源氏の拠点となつたのである。そして常陸国に土着した平氏の嫡流ではあるが、都を目指した貞盛の子孫たちは、既に述べたように伊勢国に少しづつ地盤を形成しつつ西国に力を伸ばしていった。

白河天皇は実質的に日本初の四十数年に亘る本格的な院政を布いたことで知られる。院政を布いた最初の天皇(上皇)は宇多天皇と言われるが、それは萌芽的なものとされ、本格的に院政を展開したのは白河法皇なのである。先帝の後三条天皇は皇太子の期間が二十年以上もあつたのに、在位僅か四年にして退位された。退位の翌年に四十歳

そこそこで亡くなっているから、健康を損ねていたのかも知れない。跡を継いだ白河天皇は丁度二十歳である。即位の直前に伊勢神宮の森に白狐が出現した。それを斎宮（神に奉仕する皇女）付きの藤原某が射殺してしまった。神のお使いかも知れないので、この馬鹿公家は島流しにされた。

その所為かどうか、白河天皇（上皇・法皇）は靈力の有る白狐のように十数年間の在位期間と四十数年に及ぶ院政の期間に強力な支配体制を構築し天下人として君臨した。「天下三不如意」として「賀茂川の治水、双六の賽の目、比叡山の山法師（僧兵）だけは思うように成らない」と言たと伝えられる。双六の賽の目はともかく、治水は工事を行えば何とかなるであろうし、僧兵のさばり出したのは藤原政権が仏教界を甘やかした結果である。多分、僧兵を牽制するための策かとも思われるが白河天皇は治世十数年で應徳三年（一〇八六）十一月二十六日、八歳の息子（堀河天皇）に譲位し、自分は先皇として統治したのであり、実質的に院政を開始したことになる。

奈良時代から平安時代の官職は文武天皇の大寶元年に（七〇一）制定された「大寶律令（たいほうりつりょう）」を基本にしていた。途中で、孝謙天皇から淳仁天皇の時代に藤原仲麿こと惠美押勝が勝手に組織を改正して専横を極めたけれども、弓削の道鏡が称徳天皇に見出されてから旧来の制度に復したのである。平安時代には平城天皇や宇多天皇が一部を改正したり、嵯峨天皇が側近として「藏人所（くらうどとこ）」を置いたりしたが大筋では変わっていない。

少し長くなるが、これは「嘘」では無いので、武士階層に関わる概略を述べて置くと国防関係で

は「兵部省（ひょうぶしょう）」が諸国の兵士や軍事のことを所管していたが軍馬、兵器、音楽隊、軍用犬のなどが外されたから先に述べたように役人の肩書だけの官職になってしまった。国防の組織は九州の太宰府と奥羽地方の鎮守府に任せ切りのような形に変わり、何か有れば源氏・平家に下請けをさせるようになったのである。

その代り、と言うのも変だが大将・中将・少将から大尉・少尉など、旧軍制度下の階級で組織されていたのが宮殿の守備に任ずる「府」である。天皇の御座所に近い場所から「近衛」「兵衛」「衛門」の各府があり、それが左右に分かれていた。近衛府は最も天皇に近く奉仕し、行幸の供（警護）を兼ねるので駕籠を担ぐ者まで選りすぐった官僚で固めていた。兵衛府は御所内特定の門の警護を担当し、行幸啓の供をして雑役を兼ねた。衛門府は宮城の警衛と行幸の供奉が任務ではあるが、近衛のように形だけではなく、有事に備えて弓矢を持つていた。常に矢を収納する鞆（ゆきうづつば）を背負って供をするので鞆負（ゆげい）と呼ばれていた。近衛・兵衛両府が文官的なのに対して衛門府は武装しているが、軍人ではない。

一般行政に関しては太政官以下各省、各職のほか寮や司、坊などがあつた。地方にあつては国司、判官、属官として充てられ、下には史生（ししゅう）が付けられていた。

さて白河天皇が退位し八歳の幼帝が即位したとなると国政の後見役・補佐役が必要になる。藤原氏の全盛時代には、それを良いことに一族が入れ替わり立ち替わり天皇を退位させては政治を独占していた。白河天皇の父親である後三条天皇は、

母親が三条天皇皇女で皇后であつたから藤原一族と距離があり（…実は其の為に皇位継承が遅れたのだが…）政治を「天皇親裁」に戻す意図がありながら早死にした。白河天皇は白河上皇として堀河天皇の政務に関わる必要が生じ、先帝の意図を体して院政を開始したのである。

少年天皇と雖も、御所に居て周りは文武百官に取り巻かれているから、後見人であっても上皇が天皇と同居と言う訳にはいかない。一通りの設備を持つ政庁が必要になる。これが「院庁」であり「院司」と呼ばれる公家や官僚らが奉仕することになる。院庁の長官は「別当」と呼ばれ大臣に相当する者を頭に数人が居たようで平家物語などに登場する「執事」「執権」などは別当のことらしい。別当の下には「年預（ねんよ）」とか「判官代（ほうがんたい）」などの職があつた。官位は高いが判官代が国府の大掾に当る職であろう。

良く考えると国家統治の機能が二つ存在することになり、あれこれと都合が生じる…ハッキリ言わせて貰えば無駄が増えることになりそうであるが口にだせない。当然であるが、宮殿の守護とは別に、院を警護する為の専門の職業が必要となり、御所とは別に武士の就職先が開け官僚独占の場に武士の活躍する機会が増えることになったのである。院に仕える武士は院の御所で北に面した場所が詰め所になっていたもので「北面」と呼ばれたのであるが、主人の上皇又は法皇が天皇を後見しているような意識が在ったため、北面の武士は、ともすれば態度がデカかったようで、天皇に仕える公卿・殿上人に対しても無礼な振舞いが有つたと記録されている。一つの弊害である。それでなくとも「天皇」と「上皇」という権力機構の二重

構造は相互に疑心暗鬼を呼び、怨霊が居なくても伏魔殿と同じ状態になるから、これがやがて「保元の乱」「平治の乱」を誘発し、この合戦に打ち勝った「平氏」の時代が花開いて藤原一族も終末期を迎えるのである。

白河上皇が院政を始めた翌年の寛治元年（一〇八七）には陸奥守であった八幡太郎義家から奥州の豪族・清原氏の内紛に始まった「後三年の役」を平定した旨の報告が来た。義家は朝廷に対して従軍した部下に恩賞を与えるように要請をしたのだが、朝廷は是を「嘘」とは言わないまでも「私闘」とみなして却下した。一説では義家が自腹を切って部下に賞を与えたと言われるが、切腹させられる武将もいるので自腹は安いものであろう。義家は都に戻って来たが恩賞を貰うことも出来ないくらいであるから、武士としての就職も出来ず失業手当で暮らす日々が続いていた。親分がそういう状態であるから、多くの武士が仕事を求めていたと思われる。

白河上皇の院政が開始されたのは應徳三年（一〇八六）の年末近くらしいが、北面の武士が置かれるようになったのは十年ほど経ってからのことである。その間は御所を護る近衛など三衛府が出張警備していたと思われる。北面の武士が置かれるようになったのは、失業武士救済の策も有ったかとは思いますが、一つの切っ掛けは堀河天皇の病気である。嘉保二年（一〇九五）夏頃、堀河天皇が病気になった。頼り無いながら医者も居たとは思いますが、大概の病気は祈禱や読経で直す時代であるから一向に良くならない。なお、少し後の時代の話になるが当時の日本で医者らしい医者が居たのは京都と常陸国府（石岡）だけであったとする説

もあるらしい。それはともかく、陰陽師に診断させたところ、何やら物の怪（もののけ）怨霊の仕業のようだと言断した。緊急対策として御所周辺の警備が強化されることとなり院の警備まで手が回らなくなったのだと思う。

天皇の病気を案じた白河法皇は、東北の戦場から帰ってきブラブラしている源義家のことを思い出した。武力をもって怨霊も退治できるのでは：急遽、呼び出された義家は用件を聞いて戸惑ったが仕事に有りつくチャンスであるから大弓を抱えてやって来た。天皇の病室は宮殿内にあるのだが宮殿に昇るにも天皇の近くに寄るのも、一定の身分が無いと出来ない。当時の義家は正五位程度の官位しかないから辛うじて上には昇れるが天皇の傍には寄れない：前太平記には弓を鳴らして怨霊を追い払った功績で正四位となり、内の昇殿が許されたことになっているが逆だったと思う。お祓いの為でも天皇の傍に寄るには官位が必要だったのである。戦場帰りの武将が恐ろしい顔で大弓を引き絞っているのを見て、怨霊も逃げ出した？

日本外史では、怪しい病気になったのが白河上皇自身であるとしている。「怖いもの無し」のような白河上皇も、正体は分からないが夢に出て来る怨霊に悩まされた時期があったらしい。夢であるから睡眠薬でも飲めば良いのだが、上皇は武門の頭領ということで源義家に「怨霊を鎮めるため武器を持って来るように：」命じた。義家は一張の弓を献上し、上皇は弓を枕許に置いて寝たら怨霊が出なくなつたと言う。弓が苦手なところから推測すると、白河天皇即位の前に射られた伊勢神宮の森の白狐が挨拶に来たような気もする。しかし嫌いな弓を献上された白狐の恨みからか八幡太郎

義家は武士としての功績と名声の割には官位が低く院への昇殿が許された程度に終わった。

石岡近辺でも八幡太郎義家は神様ぐらいに崇拜されているので言い難いが、此の人は武士として大活躍をしたわりには晩年が不運だったようで、約二十年後には義家の嫡男である源義親が対馬の国司として在任中に反乱を起こした。辺境に行かれた不満かも知れず、九州から山陰地方で大暴れをして反逆者として討伐された。この事件を制圧する仕事に有りついたのが、平清盛の祖父・正盛なのである。源氏の蔭で目が出なかつた平氏がようやく活躍の場を得られるようになった。四流のうちの桓武平氏（伊勢平氏）である。

日本外史には、六十八歳で死んだ源義家には六人の男子が居たと記されている。息子が六人も居たのであるから、清和源氏の嫡流が堂々と伝えられる筈なのだが何の因果か栄光は途切れた。大手の合戦屋として多数の人命を犠牲にして来た祟りと言えないことも無い。後に頼朝は義経を初めとして身内の者など多くを消しているが、曾祖父に当たる義家の頃から清和源氏は同族内の争いが頻繁に起きている。桓武平氏も将門・維衡・忠常らのことがあるから胸を張っては言えないが、同族の喰い合いは源氏よりも少ない。

義家の長男は義宗であるが、朝廷に仕えていて若死にした。次男が謀反人となった義親である。

三男の義国は新田・足利両氏の祖である。源氏の嫡流を継ぐ立場になったのだが荒武者として知られ家臣も荒武者が揃っていて、行列のトラブルから威張って恥をかかせた藤原某の屋敷を綺麗に焼き払ったから都に居られなくなった。四男の義忠が源氏総領となるのだが、出世の途中で暗殺され

てしまう。犯人は鹿島某という家臣になっているが実は黒幕が居て、何と佐竹・武田の祖先である新羅三郎義光（義家の弟）の仕業であるとする説が有力であるから茨城県民としては微妙である。五男、六男の系統は保元の乱で消えたり、平氏の台頭により地方に埋没したらしい。

息子に背かれた義家は謀反人となった義親の遺児・為義を養子として清和源氏嫡流を相続させたのだが、その為義が保元の乱で敗者に回り、二十三人も居た為義の子供の中で長男の義朝も平治の乱に平清盛に負けて斬られる。木曾義仲の父親義賢）とか鎮西八郎為朝とか、後に「平家打倒の令旨」を配達する行家とかは二十三人の中である。ここで源氏は消滅する予定のところ、義朝の嫡男（頼朝）が未成年であったため、既に述べたように池禪尼の嘆願に負けて平清盛が死刑判決を無期懲役に変更し、日本の歴史が変わることになる。やがて頼朝が再興はするのだが、華々しかった八幡太郎義家の行動に比べると何とも情けない清和源氏の末路である。特に義家の次男・義親が西国で起こした反乱は目的も意図も良く分からず怨霊にでも取りつかれた所業としか思えない。

堀河天皇は八歳で即位し、二十数年の治世で嘉承二年（一一〇七）に亡くなった。堀河天皇の第一皇子である鳥羽天皇が後を継いだけれども未だ五歳であるから引き続き白河上皇（法皇）が院政を続けていた。鳥羽天皇の即位二年目早々に、平正盛が反乱者の源義親を退治し、その首をぶら下げて都に凱旋してきた。反乱から七、八年が経っている。都中の人々が見物に繰り出し、熱狂的に行列を出迎えたと言われるが、それを見た当時の人々は「武士」の存在を目の当たりにしたので

ある。これで平氏の株が少し上がり、源氏は家元の息子が首だけで「謀叛人」とされていたからドウにもならない。

ところが奇妙なことに討たれた筈の「源義親」が日本の各地に現れて騒ぎを起こし、義親として捕らえられる事件が十数年も続いたと言われる。常陸国にも義親が居た。西国で誅された者の怨霊が各地に出張するのは不自然である。そのために義親の追討は失敗したが、白河法皇が源氏から平家に合戦の発注を切り替える目的のパフォーマンスが有ったのでは：と疑われている。平家の時代が到来しかけたのである。

しかし数か月後には比叡山の僧兵が日吉神社の神輿を担いで京の都に乱入するという情報が伝わった。白河上皇が双六の賽と賀茂川の治水と三点セットで手に負えないと嘆いた連中であるから何が目的なのか分からないけれども朝廷も困って平氏と源氏とに出動命令を出して防衛させた。「合戦屋」の二社が売り出したことになる。現代のセウイ経営者とは違って彼らは談合も値引き競争も株の買占めもせず、ひたすらに切磋琢磨して武力供給に応じた。

当然ながら武力行使によって敗者は消え勝者は残る。多くの犠牲者が出ることになるのだが、これが一々恨みをもって怨霊化しても数が多すぎるから收拾が付かなくなる。怪しいものの出番は自然に消えて行くのである。（続く）

【風の談話室】

ふるさと風も先月号で7周年となった。それで、今月号が7周年記念号とすることになった。ふるさと風の会が誕生するきっかけとなった「ふるさとルネサンス塾」がスタートしたのは、2004年であるから、ふるさとルネサンス塾の第一期生であった打田昇三兄、兼平智恵子聖女との関係から数えると、もう9年になる。

此の編者である小生が、ルネサンス塾の講師を務めるきっかけを作ったのは打田昇三兄で、打田兄とは、その前年からであったので、打田兄とはもう10年のお付き合いという事になる。

小生、石岡に越してきたのは1999年2月であったが、3年程は東京の事務所に通っていたので、打田兄との10年間が石岡での暮らしと言ったことにならぬ。

縁は異なるものとは言いが、男同士の縁も矢張り異なるものだと実感している。その打田兄は、1000枚の長編を書き上げると、次にはもう平家物語の私翻に取り組んでおられる。

小生の一回りも大先輩であるが、衰えぬ創作意欲には頭が下がる。現在、巻1の昇三訳が終わった所であるが、巻10までの道のりはまだ長い。小生も

《ふるさと》

アレンジ・書装・書架会館料理の店じや。

（ギター文化館通）

看板娘（大）「つひら」ちゃん

皆さんをお迎えいたします。

電話0266-43-6000

負けずと頑張らなければならぬ。 (つづき)

【ヨイショ広場】(陸平をヨイショする会)

生命のある限り

田島早苗

御歳八十才で、世界最高峰のエベレスト登頂に成功された三浦雄一郎さんの快挙により、最近の暗いニュースに沈みがちだった心に明かりが灯り、「三浦さんより一才若い私だもの、まだまだ頑張れる筈だ」と気分を奮い立たせている単純な私。

春先に引いた風邪が中々抜けきらず、お蔭で、たつぷりと、来し方行く末に想いを馳せる時間に恵まれた。「この年まで生きたのだから、何時死んでも悔いはない」と言っている割には、この世にさようならをする準備が全く出来ていない自分に気が付き、少々うろたえている。そんな中、タイミング良く「傘寿記念の二四会を開催します」というハガキが故郷岐阜から届いた。

昭和二十一年の春、終戦の混乱の中で最後の女学生として、名門校とは言え空襲で焼けた校庭の雨漏りのするバラック校舎で、墨で塗りつぶした箇所が目立つ教科書と、手探りで教える教師を相手に、一生懸命学んでいた少女達。出征兵士の家庭へ勤労奉仕に行き、鍬を担いで道ばたの開墾、校庭の開墾等に時間が取られ、ほとんど勉強できなかつた小学時代の遅れを取り戻そうと皆真剣だった。

二年生の時、新しい教育制度六・三・三制が発足、父兄の寄付で建った新校舎で一度も学ぶことなく、男子校と合併のため思い出の学舎を去ることになってしまった。空襲で丸焼けになった我が

家では、進学もおぼつかない状態だったが、担任の先生の熱心な懇願に負けた両親から、「どんな惨めなことにも耐えられるか」と釘を刺されての神学だった。学費や寄付を工面する母の苦勞をつぶさに見ていた私にとって、二倍の悔しさだった。

更に学区制なるものが敷かれ「併設中学」と命名された中学課程を昭和二十四年に卒業した時点で学区毎に振り分けられ、散り散りに成ってしまったのだ。この日を永遠に忘れないために立ち上げた「二四会」で折に触れ友情を確かめ合ってきたのだ。

ずいぶん説明が長くなってしまったが、二十年前に一度参加しただけの「二四会」に参加しようと思いついたのは、生きることを問い直したいため、ほんの気まぐれだった。

駅前で会場になる観光ホテル差し回しのシャトルバスに乗り込んだ私は、派手な挨拶が飛び交う車中で、浦島太郎の心境だった。誰とも連絡を取らないで、その上茨城という遠方のため、前日から駅前のホテルに泊まり込みで参加した間抜け者は、「来なければ良かったかな」と後悔し始めている。

「八十という高齢の同窓会だもの、きつと参加者は少ないだろう」という予想は見事に覆され、会場のホテルはそれらしき人で溢れていた。ざっと見回しても何となく面影は残っているが名前までは思い出さない人ばかり、受付の幹事さんの中から「久しぶりにお会いできるのを楽しみに待っています」と添え書きを寄せてくれた友を見つけ、地獄に仏とばかり「トコちゃん！」と叫んだ私の声は一オクターブ高かった事だろう。

傘寿記念という通知を受け取った誰もが、是が

最後の二四会と考えたらしく、初めての参加者も多く、九十五名と言う盛況だった。

どきどきとするほど老けてしまった人、十年の生き様は外見を見事に形作っていた。同じテーブルの両隣は、一度も同じクラスに成ったことがない人で、初対面の人と話すようだったが、人それぞれの人生を聞くことが出来て楽しい一時を過ごすことが出来た。前向きに色々なことに挑戦して、現在も活躍している人はやはり若々しく、すっかり煽られてしまった。

見事に変貌を遂げた岐阜駅前には、金ぴかの織田信長像が建ち、観光に一役買っていた。短い人生の中で素晴らしい偉業を成し遂げた信長、長くも短くも、命ある限り力一杯生きる。それが人間なのだ、改めて想っている。

【ことば座だより】

人生は自由自在の道化の芝居

白井啓治

『人の世は、しばし旅居の仮枕。』

そうさ、人の世なんて精々2泊3日の道化の旅のようなもの。

長旅ならば、自分の枕も欲しくなるだろうが、2泊3日じゃあ二日酔いにも似た道化の旅さ。

御大層に構えるようなものじゃない。だが、2泊3日の道化の旅に、塵の様な欲を満載させようなどと考えられちゃあ困ることよ。』

とは、十月に行う東京公演の台本を書きなおよすにあたっての、テーマの覚書とでも言うべきもの

である。

ことば座の東京公演は、ホルストが伊藤道郎のために作曲したという「日本組曲」を主題に伊藤道郎に捧げると銘打つての、ふる里ヨイシヨの物語である。しかし、そこに脚本家特権として三島文学の精神性の喜劇ではないが、人生をしばし旅居の仮枕、と斜に構える小生の道化心を抱かせてみよようと思つての覚書でもある。

そんな小生の思いがどのようにして届いたのか結果としてその必然性はあつたにしろ、ダンスマイムのヨネヤマ・ママコさんとの面識が生れ、共演にまで発展したのである。

ママコさんと話しをしていて、聖女曰く「私のマイムの本質は道化。それも確りと体制を批判する道化」と断言された。それが、小生の裡の柱を吊るしている琴線に触れて、体制批判の将門伝説を道化としての舞劇にできるのは我らしかないだろう、と一人合点。

ママコ聖女は、伊藤道郎が没する直前まで指導を受けたのだという。ママコ聖女がアメリカに渡るに際しても、色々な指導を貰ったのだという。

偉大なる先達者は、後に色々な因縁を振りまいてくれる。先達の振りまいた因縁の粉が、思わぬところで結びをつくる。因縁果とはよくぞ言ってくれたものである。

小生、何もしいない予行演習のつもりでやって来た茨城は霞ヶ浦のほとりに、全く予期しなかった因縁の芽が生え、あれよあれよといううちに一つの形を成そうとしている。意味不明の飛躍であるが、これはもう道化する他はないだろう。

突然に生まれた美浦村の劇団宙の会の市川兄との面識。ランボーの話聞いて、市川兄には迷惑

であろうが皮膚感覚の類似したものを思つてしまった。そして、市川兄より柏木久美子さん（久美ちゃん）との出合を創出して頂き、ことば座で共演して頂いている。

久美ちゃんが伊藤道郎の門下であり、現在ミチオ同門会の会長を務められている。記憶から失われようとしていた伊藤道郎が突然姿を現し、その孫弟子である久美ちゃんと一緒に舞台を作ることとなつたのである。

そして伊藤道郎とグスタフ・ホルストに出会う事となつた。まだ演じた事のない「日本組曲」を舞劇にするなら、ふるさとのヨイシヨを思うこの地の物語でしょう。そこに降つてわいたのが、常陸の国の恋物語として一度は書きたいと考えていた平将門に纏わる伝説、苜蓿姫物語であつた。大先達の振りまいた因縁の粉は、まるで台本の書き割りである。この因縁果にはただただ真面目に道化してみる他ないだろう。

『人生なんて

人の世なんて所詮は道化の明け暮れ

道化の移ろいに吞まれて死暮れ

悲しむこたあないさ

悲観するこたあないさ

……（中略）……

人はひたすらに生き急ぎ

人を滅ぼしていく

これを道化と言わずして何んという

とかく浮世は色と酒

ささ飲んだり悪縁因縁

たけき者もつひには滅びぬ』

と、こんな舞詩を、ママコ聖女がダンスマイム

して物語の道を拓いていく。そして、最後の場には、

『……………

権力・財力がなんだつて言うの

地獄にも極楽にも沙汰の銭などあるものか

……………

人の世はしばし旅居の仮り枕

しばしの時を自由に揺れて自在に揺れて

移ろう時に心を預け命を預けて……』

と、幕引きのダンスマイム。

この東京公演が終わると、ことば座も7周年となる。小林には、常世の国の恋物語百を約束しているのだが、東京公演でまだ三十三話である。百話、大丈夫か……。

梅雨入り宣言は早すぎたのが、雨の無い梅雨で、聊か面喰っている。水不足で、野菜の高騰が心配されており、これはもう自給自足を考えないといけな

いかなと、庭が畑に成るかと眺めています。プランター二本で年間の野菜の20%以上まかなえるとが……。一考の余地あります。

風の会では、皆様の投稿文を募集しております。毎月25日が締切日です。ぜひご投稿いただけますことお願いいたします。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>